



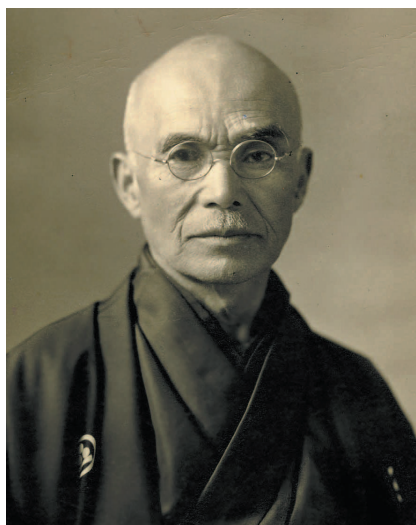
建 学 の 精 神

醫 塾

医療人たる前に、誠の人間たれ

岩手医科大学学則 第1章 第1条

本学の目的は、医学教育、歯学教育、薬学教育及び看護学教育を通じて誠の人間を育成するにある。すなわち、まず人としての教養を高め、十分な知識と技術とを修得させ、更に進んでは専門の学理を究め、実地の修練を積み、出でては力を厚生済民に尽くし、入っては真摯な学者として、斯道の進歩発展に貢献させること、これが本学の使命とする所である。



創立者 三田 俊次郎 のことば

医術は済生の根本、良医を養成して、
新付の蒼生を慈恵せよ。

「医者をたくさん養成するということは金銭の問題ではなく、実に人道と経世上の大問題であります」

昭和3年(1928)2月26日『岩手毎日新聞』記事より(岩手医学専門学校設立認可に際しての談話)



岩手医科大学初代学長 三田 定則 のことば

誠なる哉、誠なる哉、誠なくして真の医はありえぬ。

「学生は純真でいいですよ。指導の方法によってりっぱになります。私は東北人ですから美辞麗句は言えない。しかし誠の前に美辞麗句がなんでしょうか。私はこの学校を智と徳の日本一の学校にしたい。」

昭和17年(1942)4月15日『岩手日報』記事より(岩手医専校長就任式後の談話)

誠に徹底して互いに相愛し互いに相敬して
以て天分を尽くすこと。

昭和24年(1949)3月(岩手医大教職員組合機関誌『蒼穹』創刊号「蒼穹によす」より)

「誠」誕生秘話

本学父兄会報である『啐啄』第24号(平成6年<1994>12月)に、今泉亀撤名誉教授の「『誠』誕生秘話」が掲載されている。

初代校長・俊次郎の「いつも素直で、正直で、真面目であれ」という語録を引き継いだ初代学長・定則が、入

学式で「入学おめでとう。これから頑張って、誠の医師になってください」と激励していたとのこと。その薫陶を継承した^{ただ}篠田紘第4代学長が「誠」と一文字の揮毫をするようになり、3人の校長・学長によって、「誠」の精神が定着するようになったという。

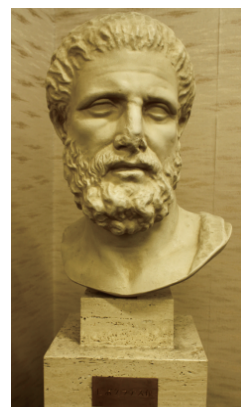
ヒポクラテスの樹

岩手医科大学初代学長・三田定則は、ヨーロッパ留学経験でヒポクラテスの精神が息づいた医学思想の真髄に触れ、本学の学是を「医療人たる前に、誠の人間たれ」とした。ヒポクラテスの箴言には「力を尽くして誠の心を尽くして実行する」という一節がある。

矢巾キャンパスのヒポクラテスの樹は、平成19年(2007)、旧教養部から矢巾キャンパスに移植されたものである。本町通の教養部敷地にヒポクラテスの樹が植樹されたのは、昭和53年(1978)である。医学

専門学校開校50周年の記念に、コス島のヒポクラテス医学校跡の原木から株分けされた。かたわらの碑に刻まれた「ヒポクラテスの箴言」は限られた時間のなかで人としての未熟さを自覚して医学を修めるべきことを説く(本ページ下、ギリシア語訳文参照)。

学是「誠の人間たれ」と「ヒポクラテスの箴言」については、本学産婦人科医だった國本恵吉氏が「特集誠」(岩手医科大学父兄会報『啐啄』第24号(平成6年<1994>12月)で医学史的な見地から詳しく解説している(國本氏については048ページ参照)。



医学部大会議室(1号館)のヒポクラテス頭像。第4代学長篠田糺寄贈。コス島から移送したもの



旧教養部から碑文とともに移植された矢巾キャンパスのヒポクラテスの樹。碑文の大きさと対比するとおよそ30年の時を経て大樹に成長していることがわかる



昭和53年(1978)、教養部の敷地に植樹されたヒポクラテスの樹。枝が細く樹高も低い



ギリシャ・コス島にあるヒポクラテスの樹の原木。平成13年(2001)、法医学分野・出羽厚二教授撮影



矢巾キャンパスのヒポクラテスの樹の碑文

碑文

ヒポクラテスの樹

この樹は、西洋医学の父ヒポクラテスが故郷ギリシャ・コス島に建てた医学校跡に一千数百年を経てなお繁るプラタナスの直系株で、ヒポクラテスの樹と称せられる。

われわれは本学五十周年を記念してこの樹を植え、ここにヒポクラテスの箴言^{しんげん}を刻み、もって医聖ヒポクラテスの精神に従うよすがとする。

ヒポクラテスの箴言

Ὁ βίος βραχύς,
ἡ δὲ τέχνη μακρὴ,
ὁ δὲ καιρὸς ὀξύς,
ἡ δὲ πεῖρα σφαλερὴ,
ἡ δὲ κρίσις χαλεπή.

人生は短く
学は遙けし
機は逸し易く
試みは過ち多く
判断は至難なり

昭和五十三年六月
岩手医科大学学長 三田俊定

箴言訳／石渡隆司(元本学哲学学科教授) 書／奥瀬素玄

校章・シンボルマーク

校章「毆(えい)+巫(ふ)+大(だい)」の由来

「毆」は医者进行意味する。「毆」は医の正字「醫」の上部でもあり、「矢」を入れるための矢立のことだ。矢は、医療器具の象徴である。そして、古代「矢」は神の憑代よりしろでもあり魔除けでもあった。

「毆」1文字だと病者の苦しみの声を表す。「巫」は天と地をつなぐ人が2人いるという文字である。「工」(確かな技術を表す)という字の左右に人が

2人いる。人が腰をまげて頭を垂れているデザインになっている。神の前で謙虚にぬかずく医療人の姿である。病者の声に耳をかたむけ、天の教えを的確な医療技術で地上(民衆)にもたらし、救世済民に尽くす謙虚な医療人、その人が2人集まりチームとなって医療を实践することを象徴している。「大」は大学を表す。



岩手医学専門学校の校章の下に大学を表す「大」の字を置いた岩手医科大学の校章

シンボルマーク「フューチャーストライプ」の由来

岩手の自然の象徴・岩手山をモチーフに、「Iwate」の「i」と「Medical」の「m」を図案化。校章に用いられている「毆」「巫」「大」と、医・歯・薬の3つの学部を3本のストライプで表し、その上に位置する楕円は未来を表現。ストライプ

と楕円で構成される部分を「岩手医科大学フューチャーストライプ」と定義し、欧文ロゴタイプと合わせてシンボルマークとした。平成19年(2007)3月28日制定。



さまざまな帽章・徽章



角帽は岩手医学専門学校のシンボルだった。医専11期・小池隆一氏所有の角帽。ご子息・博之氏によって本学に寄贈された。創立60周年記念館歴史資料コーナーに展示



角帽右側の耳章には髑髏が用いられている



「Iwate Medical Collage」(=岩手医学専門学校)の頭文字「IMC」をデザイン化した襟章。医科大学=Medical University昇格後も、昭和50年代までは新入職員に配布された



岩手医科大学の丸帽



看護師の帽章、七宝焼の「桜花」

俊次郎・定則の顕彰

創業者・三田俊次郎と初代学長・三田定則の胸像が内丸地区の1号館と図書館本館にある。いずれも当時第一線で活躍していた岩手出身の彫刻家の手による作品である。



三田俊次郎胸像

昭和33年(1958)、三田俊次郎胸像除幕式が開催された。作者は吉川保正である。設置されているのは1号館の1階、大正15年(1926)に作られた螺旋階段と調和する赤御影石の台座に乗ったブロンズ像である。それより前、昭和2年(1927)に、吉川



杉立義郎胸像

の手による初代病院長・杉立義郎の胸像が建立されている。当初は1号館前にあったが、昭和53年(1978)に附属病院前に移設。(移設跡地に宮沢賢治詩碑建立)



吉川 保正

明治26年(1893)～昭和59年(1984)
宮古市出身。盛岡中学校、東京美術学校卒。民芸への関心が高く、柳宗悦とともに東北地方の民芸発掘に尽力。舟越保武に影響を与える



三田定則胸像

昭和47年(1972)、記念図書館(内丸図書館本館)の開館を記念し、2階ロビーに三田定則胸像が設置された。作者は彫刻家・舟越保武である。舟越50歳のときの作品。日本二十六聖人記念碑やダミアン神父像などで知られる舟越の静謐なかに気迫のこもった作風が遺憾なく発揮されている。



長崎市にある日本二十六聖人記念館(昭和37年(1962)開館)の前に建てられた舟越作「日本二十六聖人記念碑」

岩手県立美術館所蔵「ダミアン神父」。ダミアンはベルギー出身の神父。19世紀後半、ハンセン病患者を隔離したハワイのモロカイ島で奉仕活動を展開した



舟越 保武

明治45年(1912)～平成14年(2002)
二戸出身。盛岡中学校、東京美術学校卒。東京芸術大学名誉教授。石川啄木や萩原朔太郎の頭像や田沢湖畔のたつこ像、キリスト教信仰やキリシタンの受難を題材とした作品がある。岩手県立美術館には舟越保武展示室がある



校歌



3番の最後は「見よ杏林の風薫る」と謳いあげる。矢巾キャンパス西側には30数本の杏の木が植えられ杏林を成す。杏林は「医者」の意。古代中国の神仙董奉が、多くの病人を治し、治療代の代わりに杏の木を植えさせた故事による

校 歌

Tempo di marcia
(♩ = 112)

土井 晩翠 作詞
山田 耕 作 作曲

ああせいせい の とく の あと でんらの ひかり じんかい の
よろこび じん の じゅつ は あり やめよ おれど なやめ ーるを
ずくは じん の じゅつ ーここに



1号館前の岩手医科大学校歌碑

岩手医科大学校歌

土居 晩翠 作詞
山田 耕 作 作曲

ああ生々の 徳のあと
天地の光 人界の
喜び仁の 術はあり
病める弱れる悩めるを
救はん 仁の術ここに
奥羽のもなか 杜の陵
中に今見る 我が校舎
高き尊き 天職を
かしこみうけて幾百の
健児学びの 窓による
心を治め 技を練り
日々向上の 一途に
わが青春の 血ぞ熱き
三たび肘折る 法のあと
見よ杏林の 風薫る
ああわが健児 昔より
知の一切を 料として
進み来りし 道により
人類愛の名によりて
世に光明を 照らしめよ

作詞者 土井 晩翠

明治4年(1871)～昭和27年(1952)

詩人・英文学者。仙台二高(現・東北大学)教授を勤めながら詩作活動を行い、詩集『天地有情』刊行。島崎藤村とともに「晩藤時代」を築いた。「荒城の月」の作詞者。戦後は、戦前から行っていた校歌の作詞に専念。岩手県内では、本学のほかに、宮古市立宮古小学校、釜石市立小佐野小学校、釜石商業高校、久慈農林高校、私立岩手高校、盛岡工業高校、花巻農業高校、黒沢尻北高校、水沢農業高校、広田水産高校、一関第二高校、一関農業高校、一関工業高校。大学では、弘前大学、東北大学、千葉大学、東京都立大学、東京医科大学、大阪大学など。



提供:仙台市

鈴木 直吉

岩手医学専門学校開設時の解剖学教授。東京帝国大学農学部出身、東北帝国大学医学部を経て昭和3年(1928)着任。戦時中満洲医科大学教授を勤めたのち、昭和35年(1960)再び本学解剖学教授となり、昭和38年(1963)に広島大学教授として転出。



校歌と学生歌成立の由来

(和田安民元教養部長宛 鈴木直吉氏書簡(昭和38年3月付)より)

昭和4年(1929)7月、岩手医学校開校1周年の記念式典を行うにあたり、校歌がないことを危惧した三田俊次郎から相談されて、鈴木氏(左下)は恩師・土井晩翠に作詞を依頼した。晩翠は作詞を快諾し、作曲者として山田耕筈を紹介した。記念の提灯行列を行うにあたり、学生が「校歌は荘重で提灯行列で街を練り歩くにはふさわしくないから、元気のいい若々しい歌を作してほしい」と鈴木氏に依頼。鈴木氏は理髪店で調髪している間に学生歌の構想を得て、その夜のうちに作詞したという。

後日校歌作詞の御礼に南部鉄瓶と金一封を持参して土井晩翠を訪ねたところ、「記念日にわしの歌をうたわないうで、へんな歌を歌って行列したそうじゃないか」と言われて、返事に窮し縮したとのこと。



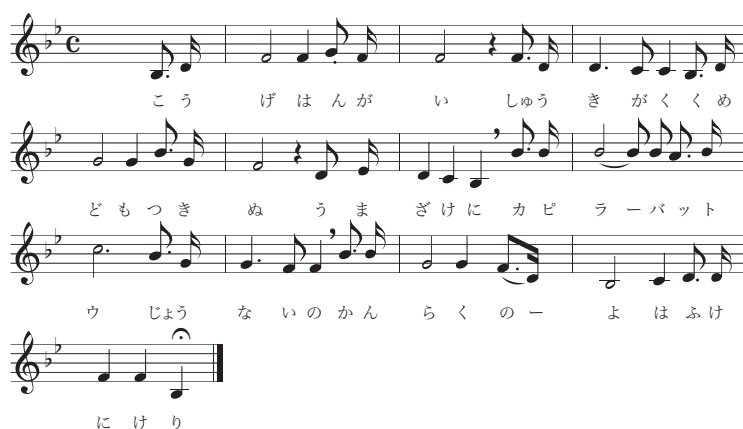
校歌・学生歌について書かれた鈴木直吉氏書簡

学生歌

医大生



Temps di marcia



岩手医科大学学生歌

鈴木直吉 作詞
 武田忠郎 作曲

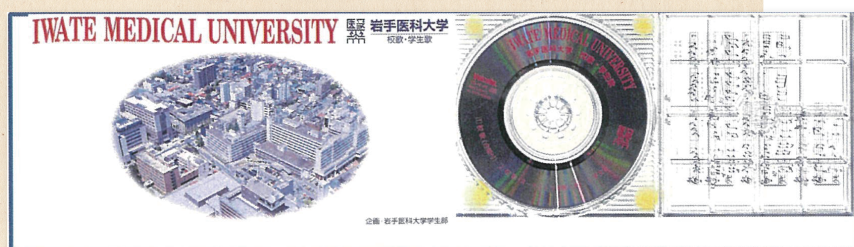
こうげばんがいしゅうぎらく
 香華幡蓋衆伎楽
 汲めどもつきぬ美酒に
 カビラバット城内の
 歓楽の夜は更けにけり
 嘆くをやめよ蜉蝣の
 その狂乱の一時も
 宇宙の精華青春を
 声高らかに讃えずや
 燭炎揺らぐ三時殿
 乱舞の妓女の裾に散る
 舞のかざしの綾衣に
 示顯の教の影薄し
 三諦止観の月冴えて
 濁世の醜骸隈もなく
 四角の観の憂鬱に
 全人類の悩みあり
 十有九年の若き血に
 三世をつづる憶あり
 見よアリアンの一族に
 光るは若き悉達
 隔世ここに三千年
 東方の精集れり
 おなじ思いに若人の
 高鳴る血潮誰か知る
 富貴高名何かせん
 唯一途に若人の
 尊き使命に秘め
 東亜の峰かかげずや

学生歌にこめた思い (鈴木直吉氏書簡より)

当時学生は全国各地から集まっていた、台湾や朝鮮の学生も多数いた。医学という学科の性質からも卒業生の活躍の舞台は東北の一隅だけではなく、中国大陸・インド・アジア全域にいたるという夢を抱いていたので、釈迦国の王子シッダールタとその出家をモチーフに作詞した。釈迦が人類の悲しみを身に引き受けて出家し、その救済のために悟りを開いた思いに共感するのが、医学を志すもののあり方であると考えた。

1番の「香華幡蓋衆伎楽」は、ちようあごんきよう 經典『長阿含経』の中の第二「遊行経」(仏陀最期の旅を語る)の1節をとったもの。花を散らし、香をたき、美しい旗で飾った祭壇で妙なる音楽を奏でて仏を供養すれば、宗教心が養われるという意味である。2番は、人間の一生も蜻蛉のような束の間の命であるから、一瞬一瞬を悔いのないように謳歌すべきであることをものがな

しく歌い、3番は、父釈迦王がシッダールタを慰めるためにたてた王宮殿の季節ごとの美しさを形容しつつ、そこに神仏が顕現することをいい、4番で、天台宗でいうところの三諦(空の理論)によって物事の真実を見極めることをいい、けがれたこの世に生きる人類の悩みをみつめ、5番で過去、現在、未来にわたる人類の思いをもつアリアン族を称揚、6番・7番でシッダールタと同じ哀しみと悩みを共有する若人がここにあつまり、富や名声に目もくれず尊い使命に生きる気概を謳いあげる。



平成12年(2000)2月、学生部制作のCD。校歌と学生歌を収録する

「木の花」と石割桜といちいの木

◎ 木の花会

大正12年(1923)9月、岩手医科大学の看護婦会「木の花会」が成立する。学祖三田俊次郎が、天照大神の孫、^{あまてらすおおみかみ}瓊瓊杵尊に^{ににぎのみこと}嫁いだ木花開耶姫の名前から命名した。木花開耶姫は木の花のような繁栄を約束された存在である。「木の花」は桜の異称として知られる。



看護婦帽章「桜花」 高橋フジエ看護部長のこぼれ (『岩手医科大学月報』昭和60年(1985)1月第254号)

この帽章の桜花は、本学の創立者であり、岩手産婆看護婦学校の父とも仰いでおります三田俊次郎先生が、「木花咲耶姫」の故事にもとづいて「木の花」のように、清く美しくあれと、願いをこめら

れてお定めになられたと、今野八重女婦長さんから伺って、桜の花の別名が「木の花」であることを知りました。

◎ 石割桜

盛岡といえば石割桜である。周囲21mの巨大な花崗岩の割れ目に落ちた一粒の種が芽を出し、天に向かって伸び上がり続けて360年以上の歳月が経つという。大正12年(1923)、国の天然記念物第1号に指定された。毎年2、3センチずつ割れ目を押し広げながら今も力強く成長を続けている。

中病棟の8階9階からは石割桜を見下ろすことができる。桜の時期には、状態の良い入院患者さんを看護師がお花見に誘うこともある。石割桜は内丸で本学の成長と発展を見守り続けている。



医専3期卒業アルバム(昭和10年(1935))より。現在に比べ割れ目が小さく、今はない石片が割れ目に被さっている

◎ いちいの木

教養部開設20周年を記念して、教養部1回生から寄贈されたいちいの木。小岩井農場にあった樹齢100年の木を譲り受けた。もとは北海道深川市で育成していたものとのこと。ゆっくりと育つため緻密で均一な材質となるので、良質の家具用材となる。また、「いちい」の音が「一位」に通じるので、神事の笏など高潔な場での用材に用いられる。別名アララギ。矢巾キャンパスに移植。

教養部1回生(歯学部1期)内田英夫・教養部1回生(医学部20期)堀内三郎
「いちいの木のこゝろ」より(『教養部二十年誌』昭和60年(1985)10月)

「教養部開設20周年にあたり、樹齢100年でありながら着実に発育し、高い気品をもちつづける常緑喬木いちいの木を、我々の意を込めて後輩に贈りたいと思う」

本町キャンパス時



矢巾キャンパス移植後



昭和60年(1985)に樹齢100年だったいちいの木は、現在樹齢130年余。本学の方が一回り年少である。ヒボクラテスの樹と向かい合うように矢巾キャンパスに移植されたが、土壌が合わないのか元気がない。小岩井農場(株)の方々が一生懸命養生してくださっており命をつないでいる

2つの昭和医箴

昭和9年(1934)、医事新報社は、ヒポクラテスの箴言に相当する我が国独自の医箴を全国公募した。審査委員長は志賀潔だった。

昭和9年(1934)9月、医事新報社は賞金総額1,000円の懸賞「現代医箴十箇条」を全国公募した。応募数547篇、1等入賞・山田弘氏(福島県相馬郡・賞金500円)。志賀潔は『日本医事新報』第651号(昭和10年<1935>2月)誌上で、昭和医箴選定の目的を「西洋文物の輸入せられてより、明治大正を過ぎ、昭和の現代に入り、西洋文化は漸く渾然として融和し、茲に日本文明の振興を見んとするの機運に際会したるの時、我医界に於ても医学の新興と医業の発展とを図るべきの秋なり」と述べている。

1等入賞した「昭和医箴」について志賀潔は、「内容は莊嚴にして格調よく整い日に三誦すべきもの」と賛辞を送る。志賀潔は、この「昭和医箴」を誦んじて折に

志賀 潔

明治3年(1871)～昭和32年(1957)。仙台市生まれ。伊達藩御典医の息子。赤痢菌の発見者。慶應大学医学部初代細菌学教授。文化勲章受章者。本学女子医学生第1号・志賀ミエ(088ページ参照)の縁戚



触れて揮毫した。第1条の「医たる者は済生救民の誠を致すべし」という一節は、本学の建学の精神に通じるものである。

本学には志賀潔が揮毫した昭和医箴が2幅ある。2号館3番教室と、創立60周年記念館歴史資料コーナーのものである。前者は8箇条、後者は10箇条からなる。後者全文は次のとおり。

昭和医箴

凡そ医たる者は其診療所を學術研究の道場 精神修練の聖堂と心得 日々其業務に尽粋し 済生救民の誠を致すべし

医学の興隆分科の精進にし方、今医たる者堪能なる一部門を有すると共に 広く知見を各科に求め 偏見なきを要す

医は冷厳なる科学の知識を基礎とす 然りと雖ども人生自ら機微なる者あり 医人須らく学徒の矜持を失はず 情意並び行はるべし

患者の性格環境の差は治術に関する所大なり 治法人に即して適切なるべし 能く察し慈眼以て起死回生を図るを要す

診断予後を告ぐるに慎重なるべし 特に大患不起の際に於て然りとす 信実を内に蔵し 慰安と光明とを与ふ

是仁心の発露なり

治療の支障なき限り費用の軽減を図るべし 特に慢性長期に渡る時に然りとす 経済に意を致す 是亦仁の端なり

學術精研なるも 孤高狷介世に容れられざるあり 医たる者常識を涵養し 世情に通ずべし 然りと雖ども卑俗に墮する勿れ(※)

同業に対しては老弱序を重んじ互に敬愛し医風の向上と社会的地位の確保に努むべし 特に対診会同の際に於て然りとす

時運の進展に伴ひ関係法規日々多し 余暇を割き習読すべし 世態錯雑一片の情実 須臾の怠慢、不測の過誤に陥る勿れ(※)

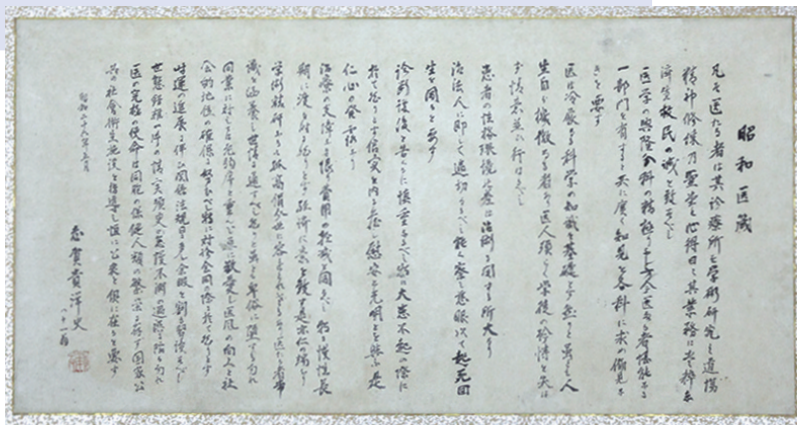
医の究極の使命は同胞の保健人類の繁栄に存す 国家公共の社会衛生施設を指導し恒に公衆と俱に在るを要す

昭和二十六年五月 志賀貴洋史 八十一翁

(※8箇条のものにはない条文)



2号館3番教室に掲げられた昭和医箴8箇条。署名は「昭和二十七年正月 志賀 潔 八十二歳翁」



創立60周年記念館歴史資料コーナーの昭和医箴10箇条。署名は「昭和二十六年五月 志賀 貴洋史 八十一歳翁」。「医専8期生古川弘平氏寄贈」の添書あり

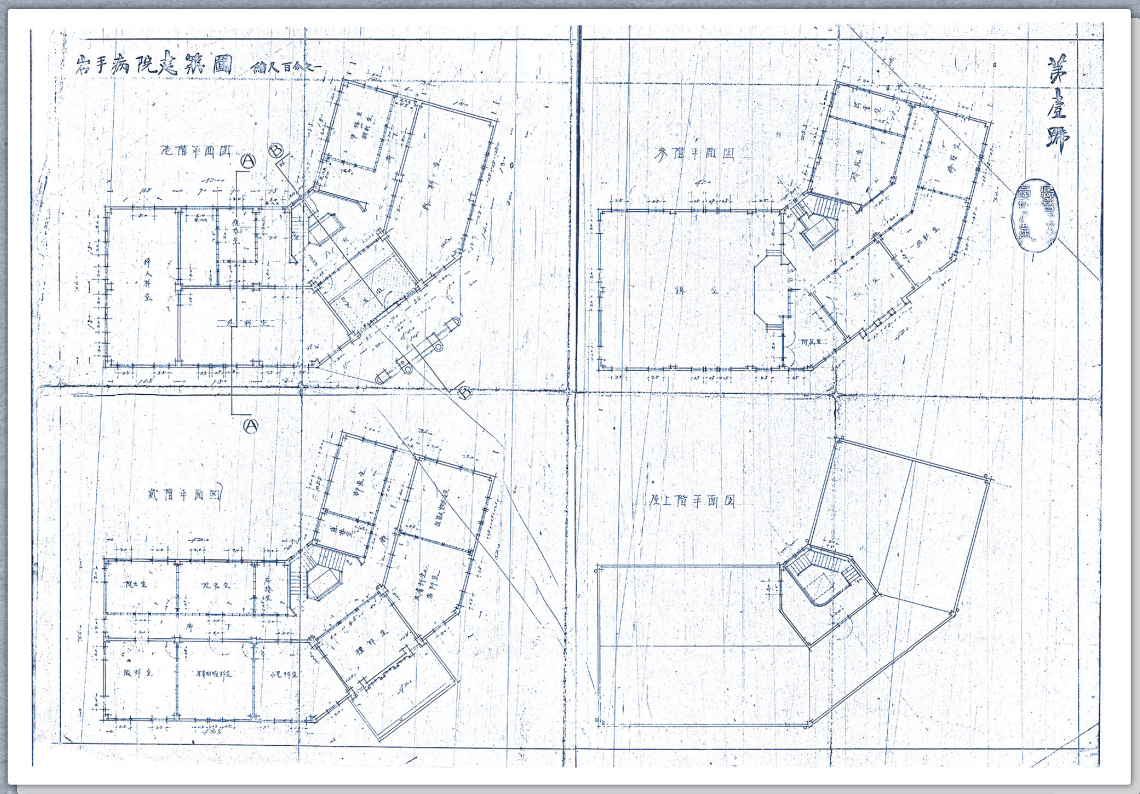
「岩手病院建築図」について

大正15年(1926)完成の岩手病院診療棟(現1号館)と、昭和7年(1932)完成の岩手医学専門学校附属医院(現2号館)の建築図が、本学施設課で保管されている。いずれも葛西萬司が手がけた建物。創建当時の青焼きの複写だが、折り畳まれ封筒にしまわれていたため改めて広げられることもなく、紫外線の影響を免れて現在に至った。

現1号館の建築図(辰野葛西事務所)と、現2号館の建築図(葛西田中建築事務所)の一部を本誌で紹介する。

「岩手病院建築図」辰野葛西事務所

その1 現1号館



図面番号【第 七 号】1階～屋上平面図